

薬師野遺跡発掘調査報告書

1981

高山市教育委員会



第1号住居跡の竈



第2号住居跡 放射状炭化物

序

このたび縄文、弥生時代の土器、石器散布地として岐阜県遺跡台帳に記載されている江名子矢林遺跡の東端にある「字栗師野」で、矢林土地改良組合による圃場整備事業が計画された。そのため遺跡の滅失が懸念される状況となった。更に農耕中に住居跡らしきものを発見したとの連絡があり、調査が必要と判断し、緊急に計画を立案、昭和54年5月より発掘調査を実施した。

調査にあたって、主任調査員として日本考古学協会員大江命氏を委嘱し、調査は高山考古学研究会を中心に行われた。作業は雨期及び炎天下かずかずの困難を克服して行われたが、期間中に市民に対する公開もあり、文化財認識の啓蒙に非常に有意義であった。

調査完了と報告書刊行にあたり、担当の皆さんは勿論、土地所有者を始め関係各位に深甚の謝意を表わすとともに、この報告書が今後この地方の歴史解明に大きな力となり、文化財の愛護思想普及に資する事大なるものと確信するものである。

昭和56年3月

高山市教育長 長瀬正三

本文目次

I. 遺跡の位置と環境	1
II. 発掘調査の経過	3
III. 地形と地質	5
IV. 遺構と遺物	7
1. 第1号住居跡 (1)	7
(2)	7
2. 第2号住居跡 (1)	17
(2)	18
(3)	22
3. 溝状遺構	24
4. なべかぶり塚	25
V. 考 察	31

挿 図 目 次

挿図1 遺跡の位置と周辺の遺跡	1
2 遺跡付近地形図	2
3 調査区域図	4
4 地層柱状図	6
5 地形と地質模式図	6
6 第1号住居跡周辺遺構平面図	8
7 溝断面図	9
8 第1号住居跡平面図・断面図	10
9 第1号住居跡出土石器類	12
10 第1号住居跡出土石器類及び鉄器	13
11 第1号住居跡出土土器片	14
12 第1号住居跡出土須恵器片	15
13 第1号住居跡出土須恵器片	16
14 第2号住居跡平面図・断面図	19
15 第2号住居跡出土土器	20
16 第2号住居跡出土土器	21
17 溝状遺構平面図・断面図	24
18 なべかぶり塚実測図	26
19 なべかぶり塚遺構平面図・断面図	26
20 なべかぶり塚遺構内埋石及び遺体	27
21 内垣内遺跡出土弥生式土器	30

図 版 目 次

口絵カラー図版 上、第1号住居跡 下、第2号住居跡 放射状炭化物

- 図版1 遺跡遠景 (A)薬師野 (B)矢林
- 2 第1号住居跡
 - 3 溝状遺構
 - 4 同 (発掘前)
 - 5 第1号住居跡 竈跡
 - 6 第2号住居跡 (放射状炭化物)
 - 7 第2号住居跡
 - 8 なべかぶり塚
 - 9 同 (土壌内埋石)
 - 10 同 (遺体)
 - 11 第1号住居跡内土師器出土状態
 - 12 第2号住居跡内器台出土状態
 - 13 第1号住居跡出土 磨製・打製石斧、砥石
 - 14 同 すり石・おもり石類
 - 15 同 削器・石鎌・紡錘車・石包丁
 - 16 同 鉄器
 - 17 同 弥生土器片
 - 18 同 土師器
 - 19 同 土師器
 - 20 同 須恵器
 - 21 同 須恵器鉢
 - 22 同 須恵器環
 - 23 同 須恵器環
 - 24 同 須恵器・灰釉陶器
 - 25 同 須恵器・灰釉陶器 (裏面)
 - 26 第2号住居跡出土 器台形土器
 - 27 同 高環形土器
 - 28 同 コップ形土器
 - 29 同 甕形土器
 - 30 同 弥生土器片口縁部
 - 31 同 弥生土器片底部
 - 32 同 高環形土器片
 - 33 同 須恵器環蓋

例 言

1. 本報告書は、岐阜県高山市江名子町大字矢林字薬師野地内の薬師野遺跡発掘報告書である。
2. 圃場整備事業により、遺跡が破壊されるため緊急発掘調査を行ったものである。
3. 調査は昭和54年5月19日より9月2日に至る間に亘って実施した。
4. 調査は下記の調査団によって実施した。

団 長 高山市教育長 長瀬正三
調査主任 大江 會（日本考古学協会員）
調 査 員 高山考古学研究会員 寺地茂雄(会長) 石原哲弥 藤本健三
野村宗作 吉朝則富 垣水富郎
高山市教育委員会 社会教育課課長 亀山喜一
係長 銅島大行
主事 坂本育男
作業協力者 高山考古学研究会員 伊藤浩子 今井和雄 岩田 修 川上富子
寺地亮平 中嶋 勇 長瀬和子 野田了平
林 雅一 洞口菊藏 丸山和雄 田之本克己
高山市立日枝中学校 郷土研究クラブ
古川町郷土研究会

5. 本報告書の挿図作成、図版の写真撮影、及び執筆は高山考古学研究会の調査員によって行なった。(写真 野村、地形・地質図 石原・岩田、遺構・遺物実測図 吉朝)
6. 調査にあたり、ご指導、助言、協力を賜った下記の方々に深く感謝の意を表する。
京都国立博物館 考古室長 八賀 晋氏 名古屋市(日本考古学協会員) 紅村 弘氏
岐阜県立博物館 学芸主事 水野 一氏
7. 発掘にご理解とご協力をいただいた地元 清水 勇氏、空野仁右門氏、空野与惣氏、中田栄造氏、及び、土地改良組合に深く謝意を表する。

I. 遺跡の位置と環境

薬師野遺跡は高山市江名子町大字矢林地内の丘陵舌状部に所在する。丘陵基部には通稱「開墾地」と呼ばれる遺物包含地があり、「岐阜県遺跡地図」には矢林遺跡（遺跡番号G12F00613）と記載されている。

薬師野遺跡付近には「薬師堂跡」や、「なべかぶり」と地元で口伝されている「土塚」があり、薬師野の地名由来ともからみ学術的に興味深い地点である。

江名子町一帯の丘陵地には、下記のように多くの先史時代遺跡が分布している。

- ① ツルネ（縄文・弥生・土師）註1 ② 家廻り（弥生） ③ ひじ山（縄文・弥生）註2
 ④ 片野糠塚A（縄文・土師） ⑤ 片野糠塚B（縄文） ⑥ 江名子糠塚（縄文・土師）
 ⑦ 矢林（縄文） ⑧ 向畑（縄文）註3 ⑨ 正尺（縄文） ⑩ 鷹之巣（縄文）
 ⑪ 町上野（縄文） ⑫ 保木（縄文） ⑬ 泉水（縄文） ⑭ 畑殿屋敷（縄文・土師）
 ⑮ 森下（山口町・縄文・弥生） ⑯ 上上野（山口町・縄文）



挿図1 遺跡の位置と周辺の遺跡(×印 本遺跡 地点番号は本文の遺跡番号と同じ)

矢林遺跡（海拔 約 675 m）は、通稱「開墾地」と呼ばれて居り、戦時中に松根油採集のため開墾され、その折に、多くの遺物が出土した。註4

現在、畑地及び苗圃となっている。畑の南側は松林、雑木林が山麓まで続き、遺跡包含地の可能性がある。

薬師野遺跡（海拔 約 654 m）は、「開墾地」から北西方向に約 350 m 離れた地点で、台地はさらに北西へ約 200 m 延びて舌状先端部に達し、約 12m の高さの崖となっている。

また本遺跡より、南東約 50m の位置に薬師堂跡があり、これを中心に、この付近一帯を「薬師野」と呼んでいる。薬師堂は現在、谷をはさんだ南西の丘陵に鎮座する白山神社に移転合祀されているが、江戸時代末元治元年（1864）にも、薬師堂の建替をしたという棟札が残っている。昔、疾病で死者多く、そのため薬師堂を建立したという。註5「なべかぶり」遺構との関係が深いと推定される。（後述）

江名子町の成田千稲氏が、高山市郷土館に寄贈された遺物（成田コレクション）の中に、薬師野と記入された石斧等が、かなり多く含まれている。しかし、出土地点は「開墾地」出土のものも混じっていると推定される。

薬師堂跡付近は、今回の区画整理の区域外であり、ハウス栽培の畑地であるが、遺物包含地である。将来のため付記しておく。

また、本遺跡の中央部農道（整地前）より東側と、舌状先端部にあたる地域は、すでに、ブルドーザによって整地がなされており、調査不能であった。（石原）

註1 「ツルネ遺跡発掘調査報告書」

昭和54 高山市教育委員会

註2 「ひだびと」昭和9-12

「ひじ山遺跡1-10」赤木清

註3 「岐阜県史原始史編」昭和47

註4 江名子矢林、中田栄造氏 蔵

註5 「江名子村郷土史考」

江名子史跡保存会 昭和50



挿図2 遺跡付近地形図

II. 発掘調査の経過

昭和54年3月、地元矢林地区の土地改良組合により、当地区の圃場整備事業（約32 ha）が行われることが決定した。高山考古学研究会では遺跡の可能性があると推定していたため、石原哲弥、野村宗作両会員が現地の再調査を行った。その結果、弥生・須恵の土器片、及び、石器材料の下呂石チップ等を数点ずつ表面採集し、地形的条件も考慮し、遺跡であると断定した。

4月20日、市教育委員会は未調査のまま遺跡が破壊されるのを懸念し、地元土地改良組合・高山考古学研究会と協議した結果、地主の清水勇氏にも了解を得、主任調査員に大江伸氏（日本考古学協会員）、調査員に高山考古学研究会員を委嘱し、緊急発掘調査を行うことに決定し直ちにその手続きをとった。

5月19日（土）高山考古学研究会員（石原・野村）及び、日枝中学校郷土研究クラブ員5名によりトレンチ設定、試掘が開始される。

第1トレンチは南北に10m×1m、第2トレンチは東西に10m×1mの十字形に設定し夕方には早くも住居跡の南北壁面が確認された。20日、住居跡の四方の壁が確認された段階で全面発掘に移行。ほぼ6m×6.5mの規模の方形堅穴住居跡（第1号住居跡）を検出する。

6月6日完掘に至る。東壁に竈1基、主柱穴4ヶ所、ピット数ヶ所確認、須恵器・土師器・紡錘車・鉄器等を検出する。

住居跡周辺の試掘もあわせて行う。住居跡西側に南北20m×1mのトレンチを、北側に1m×1mのグリット十数ヶ所を設定するが収穫なし。以後、住居跡周域の拡張作業を行う。

7月に入って住居跡北側に出現した溝状遺構の発掘にかかり、同時に第一住居跡の測量、セクション測図、写真撮影を行う。なお、6月10日には第1回市民見学会が行われ、NHKテレビ報道、新聞発表がなされた。

8月19日、古川郷土研究会の協力を得て第1号住居跡南方の試掘調査を行い、新たに住居跡1軒を発見する。20日、隈丸方形の第2号住居跡を検出。弥生式土器・炉址・柱穴等確認、8月29日発掘完了。住居跡、セクション測図・写真撮影・炭化物の採集を行う。

8月27日、第2回市民見学会を行う。

9月1日、なべかぶり塚の調査に移行。2日、埋葬人骨を発見（1体）。地元の人々と共に供養を行い、なべかぶり塚発掘終了。同時に薬師野遺跡発掘調査を完了する。

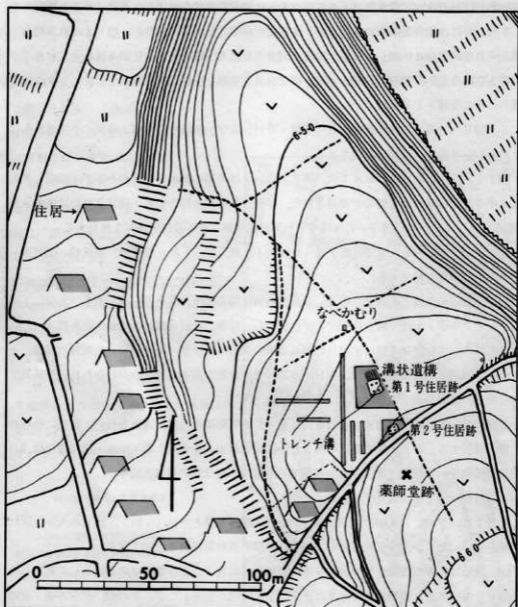
出土遺物は、寺地茂雄会員の倉庫3階に収納し、以後ここを作業及び研究室として利用した。日曜日を中心とした遺物の整理作業に予想以上の時間が経過したが、その間、信州方面・北陸方面（富山・石川・福井）への調査旅行等を通じて学習に努めた。また、八賀晋氏（京都国立

博物館考古室長)、水野一氏(岐阜県博物館学芸主事)の来高の折に、また 紅村弘氏(日本考古学協会)に多くの教示を仰いだ。

11月3日の高山市公民館祭りにおいて薬師野遺跡出土の遺物を展示し、発掘成果の公開を行った。

その他、報告書作成に至るまで関係方面の種々の努力がなされた事を記しておく。

(野村)



挿図3 調査区域図

III. 地形と地質

本遺跡の位置する丘陵地形の地質について、現在の知見をまとめると次のようである。註1
高山盆地南部の南北分水嶺の山麓には、石浦町飯山と塩屋町を結ぶ江名子断層崖に沿って、北側に約1.5 kmの幅で広がる緩傾斜の丘陵地形が発達している。

この丘陵地形は、江名子川、山口谷川によって、谷幅広く開折されて水田地帯となっている。丘陵の頂面は海拔約680 m位で、定高性をもって北へ延びている。

丘陵の地質は下部から次のような層序となっており、地形区分の基準となる。(挿図5)

- ① 基盤岩の濃飛流紋岩 江名子断層と、山口谷断層によって古生界と接している。
- ② 松原礫層 層厚約20m、円礫層で、礫種は流紋岩の大・中礫が多い。
- ③ 荒城川火砕流 高原火山岩類中の両輝石安山岩質熔結凝灰岩、層厚約40m、K-Ar年代測定で250万年前±20万年という結果がだされている。註2
- ④ 矢林礫層 江名子断層北側に分布する崖錐性の角礫層で、層厚約20m、礫種は殆んど、古生層のチャート、砂岩である。泥炭層やシルト層をはさんでいる。
- ⑤ 岩滝火砕流 高原火山岩類中の黒雲母安山岩質熔結凝灰岩、山口町の桜ヶ岡では層厚約5 mで、地元では「うんば砂」と呼んでいる。本遺跡付近では確認されていない。K-Ar年代測定で約63万年前という結果がでている。註3
- ⑥ 桜ヶ岡礫層 約10mの層厚で、赤色風化した角礫を含んでいる。
- ⑦ 広殿ローム 茶褐色粘土質ローム、角閃石を多く含むオガ層状の軽石層をはさむ。
- ⑧ 高山ローム 上部の黄褐色粘土質ロームと下部の黄褐色軽石層、黒雲母、磁鉄鉱を含む。
- ⑨ 町方ローム 新鮮な紫蘇輝石、角閃石、火山ガラスを多く含み、茶褐色粘土質ローム。
- ⑩ 表土(腐食土または黒ボク)

「ツルネ遺跡発掘調査報告書」では、高位面(天井面)、中位面(ツルネ面)、低位面(沖積面)と三つに区分したが、その後の調査によって、次の4つに区分した。

高位面(天井面) 荒城川火砕流とそれを覆う広殿、高山、町方ローム層

中位面I(ツルネ面) 矢林礫層・桜ヶ岡礫層とそれを覆う広殿、高山、町方ローム層

中位面II(薬師野面) 礫層とそれを覆う町方ローム層(高山軽石層なし)

低位面(沖積面) 沖積層

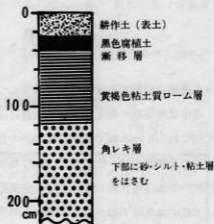
今後の精査によって、さらに区分される可能性がある。この地域の遺跡は殆んど中位面I・IIに分布している。

遺跡付近の地層区分を挿図4に示した。地表より深さ約30~40cmまでが黒色腐植土層である。

地表より深さ約20~30cmまでは、耕作によって攪乱されている。

黒色腐植土層は全般に薄く、所によっては下部の黄褐色ローム層が耕作土に混じている部分もみられる。厚さ約1.2 mの粘土質ローム層は一様であり、高山軽石層は見られない。

ローム層の下部はうすい砂層やシルト、粘土層をはさむ角礫層になる。 (石原)



挿図4 地層柱状図

註1 「高山市付近の第四系について」 梶田澄雄、石原哲英、地質学編纂 第14号 S52.2

註2 「岐阜県東部の高原火山岩類および上野玄武岩のK-Ar年代」 柴田賢、山田直利、地球科学31巻 1号 S52.1

註3 地質調査所 山田直利より岩田修宛私信による。 S56.1.5



挿図5 地形と地質模式図

IV. 遺構と遺物

1. 第1号住居跡

(1) 遺 構

薬師野遺跡において最初に確認された第1号住居跡は、南北6.5 m、東西6 mの方形プランで、周壁・床面等、良好な遺存状態であった。床面での海拔高度は654.5 m、台地が北方へ緩く傾斜しているため、住居跡南部のローム層への掘り込みは35cm、北部20cmである。西壁側が出入口かと思われる。柱穴は主柱4本が31~39cmの深さで垂直に掘り込まれ、他に大小のピットが7ヶ所存在するが、北西部の2ヶ所の浅いピット(P1、P2)には土師器片が多く包含されていた。東壁は中央部に、両輝石安山岩質熔結凝灰岩を骨材に使用した竈一基が構築され、多量の灰とともに土師器片も検出された。P1南の一部にも焼土が残り、また西壁の一部分にも長方形の川原石を伴う焼土が見られる。床面はほぼ水平で、よく踏み固められて堅く、検出は容易であった。

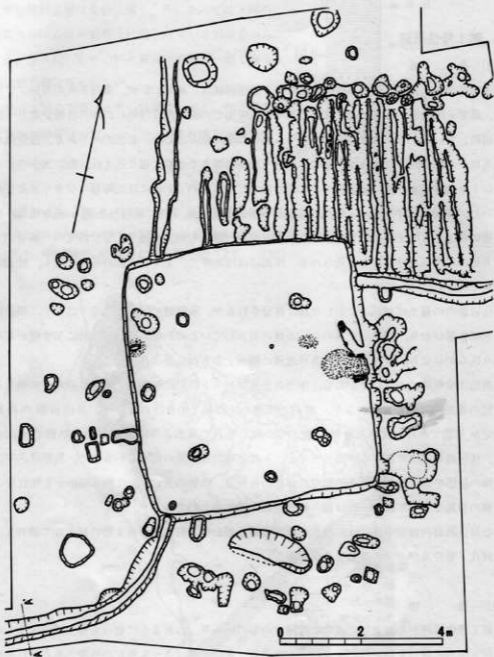
住居跡内の覆土は挿図8に示した様に区分されるが、漸移層で区画は明瞭ではなく、部分的に黒味を帯びたり、ブロック状のローム塊の混入しているのが観察される。特に第2層からの掘り込みが目立ち、これは後述の溝状遺構に関連するものと思われる。

遺物は全般的に少ないながらも、床面直上及びピット内に比較的多く見うけられ、前後する時代の遺物の混入も見られるが、竈内と床面の土師器・須恵器によって、当住居跡の時期決定が可能であった。また鉄器が竈の僅か南の地点で床面より10cm程浮いた状態で出土した。住居跡周辺に存在する多数の大小ピットは、規則性は見い出せないものの、長野県の平出遺跡の住居型式に比較してその類似性が認められる。南側の大ピットは雨水溜めかも知れない。東側の複雑なピット群の一部は竈の排煙施設に関するものであろう。

なお住居跡内南部中央には、後世の埋葬遺構と思われる石組みが第3層のレベルで遺存し、棺材片・骨片及びガラス珠数玉2個が出土した。

(2) 遺 物

第1号住居跡から出土した遺物には種々のものがあり、おおまかに言って弥生時代・7~8世紀・中~近世の3期に分類することが出来る。本住居跡は7~8世紀の所産と考えられるが、確実に本住居跡に所属する遺物は、床面近くに比較的多かった土師器・須恵器・鉄器・紡錘車・砥石・すり石・敲石・おもり石が該当し、その他の遺物は、形態的・層位的に見ても区別する必要がある。住居跡内堆積土より出土した弥生土器片・石鏝・削器・石包丁・磨製石斧・打製



挿図6 第1号住居跡周辺遺構 平面図

石斧は、ほぼ弥生時代中期の所産と思われるが、本住居跡設営の際に攪乱されて混入したものであろう。また石組みより出土したガラス小玉は、中～近世基墓墳に副葬された珠数玉と考えられる。以下に個々の説明を行いたい。

石 器

石 鏃 (挿図9-1, 2)

下呂石(黒雲母石英安山岩)製の石鏃が2点ある。いずれも半欠品で未製品かも知れない。

削 器 (挿図9-3)

下呂石製の方形を呈する削器が1点あり、刃部は3縁に作出される。ピエス・エスキーユ(楔形石器)とも思われる。

石包丁 (挿図9-4)

粘板岩製の石包丁片1点で、直線状の刃部を持つ半月形のものである。孔の有無は不明である。調整は粗く、研磨されない部分を多く残す。

紡錘車 (挿図9-5)

截頭円錐形の紡錘車の半欠品で、石材は凝灰岩。全面ともよく磨かれ、孔は最大9mmである。残存部の重量は18gで、推定30g程度であろう。

磨製石斧 (挿図9-6, 7)

蛇紋岩製の磨製石斧が2点あるが、7は調査終了後の表採品である。6は下半部のみであるがきれいな定角形に作られ、鋭利な刃部を備える。7は刃部のみ完全に仕上げるが、側縁及び頭部は粗い敲打調整のまま残してある。

砥石 (挿図9-8, 9)

8は砂岩製で三角形の右半面のみ砥面をもつものである。9は凝灰岩製の方柱状をなすもので、4面に砥面を備えるが特に1面はよく使用されている。

打製石斧 (挿図10-1, 2)

玄武岩製で1はほぼ短冊形、2は撥形に近い。いずれも加工は粗く、自然面を一部に残す。

敲石 (挿図10-4)

濃飛流紋岩製で一部を欠失するが、頂部に敲打痕を残す。P₅の柱穴内より出土した。

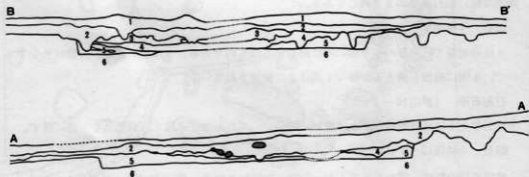
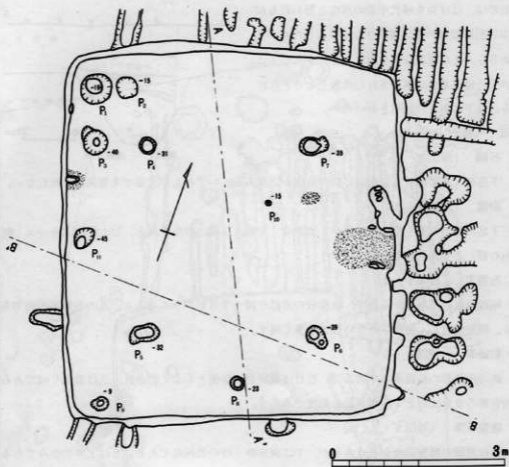
すり石 (挿図10-7)

濃飛流紋岩製の円礫である。使用の痕跡はあまりなく一応すり石に分類したが用途は不明である。

おもり石 (挿図10-3, 5, 6, 8, 9, 10)

中央部分がやや凹んで縄でくくるのに都合のよい円礫のみ集められているため、ツルネ遺跡





- | | |
|-------------------|-----------------|
| ① 黒褐色表土層 | ④ 炭・ローム混じり褐色土層 |
| ② 僅かにロームの混じる黒褐色土層 | ⑤ 炭・ローム混じり黄褐色土層 |
| ③ 炭・ローム混じり黄褐色土層 | ⑥ 黄褐色ローム層 |

挿図8 第1号住居跡 平面図・断面図

の例 註1 を参考に、おもり石として分類した。特に9は、側縁に敲打を加えて鈍がずらない工夫がなされている。ムシロなどを編むのに用いたものと思われる。9のみ安山岩で他は濃飛流紋岩製である。

鉄器 (挿図10-11)

2点出土しているが、うち1点は出土層位の点で疑問があり、近世の鋸の破片とも思われるので、除外した。11は、住居跡東の竈近くから出土したもので、かなり錆の度合いが進んでいるため原形を知ることが困難であるが、現長14cm、断面方形で頂部はひらたくなっている。恐らく頭部を板状に鍛え延ばしてコの字形に折り曲げた、大型の角釘であろう。

ガラス小玉

住居跡内に残されていた石組み内部より2点出土した。直径4mmの透明ガラス小玉でやや扁平である。

弥生式土器 (挿図11-1~8)

弥生時代に属すると思われる土器片は10点で、いずれも小破片である。1は磨消縄文で波状と直線の沈線が並列する。器厚4mmで焼成は良好である。2は櫛描波文と平行沈線が施される壺形土器頸部破片でスガが付着する。器厚7mmで1mm大の砂を含む。3もやはり平行沈線下に波状文を持ち、黒褐色で石英粒を多く含む。7mm厚。4は不規則な沈線文に8mm大のコブ状突起が付く。胎土は黒色で白色の化粧土が施される。5mm厚。5は重線文で四角の区画を埋める頸部破片で色調は褐色。5mm厚。6は羽状の沈線文土器で黄褐色を呈し器厚7mmである。7は刷毛目に交叉して波状沈線と直線が軽いタッチで浅く施文される深鉢土器破片である。黄褐色で胎土は粗く砂を多く含む。8mm厚。8は土器底部でわずかに張り出す。赤褐色で布目の圧痕を残す。

これらの土器はいずれも弥生中期後半に属し、長床式(或いは高床式)に対応する飛騨型の土器であろう。

土師器 (挿図11-9~14)

総数147片出土した土師器片には、その全形をうかがえるものは無かったが、口縁部資料から少なくとも4個体の甕形土器が確認された。9~11は刷毛目調整による細線が口縁に縦位に走り、内面にはへら削り痕が残る。9は赤褐色を呈し器厚9mm、スガが顕著である。10は黄褐色で、頸部には横位に細い沈線が2条巡った後、再び胴部に縦の刷毛目調整が施される。11は頸部に1条の沈線のみで無文で、内部に櫛状工具(木端?)による調整が部分的になされている。表面はよく調整されており、器厚7mmである。14は10の個体の胴部で、表裏両面に刷毛目が残る。焼成はあまり良くなく、もろい。いずれの土師器にも火熱を受けた痕跡やスガの付着がみられ、煮沸用に使われた事を示している。

須恵器 (挿図12-1~7, 13-1, 3~11)

総数88点で、うち復元可能個体は2点にすぎない。破片からみた器形の内わけは、蓋環2(環

插图9 第1号住居跡出土石器類

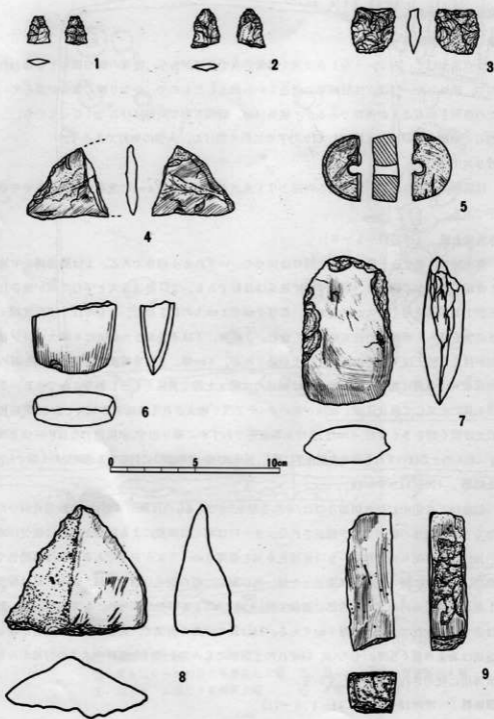
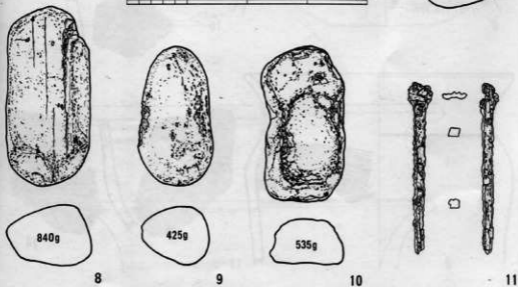
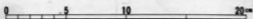
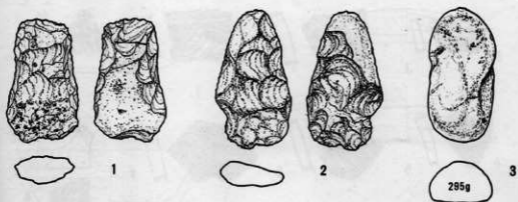


插图10 第1号住居跡出土石器類及U 鉄器



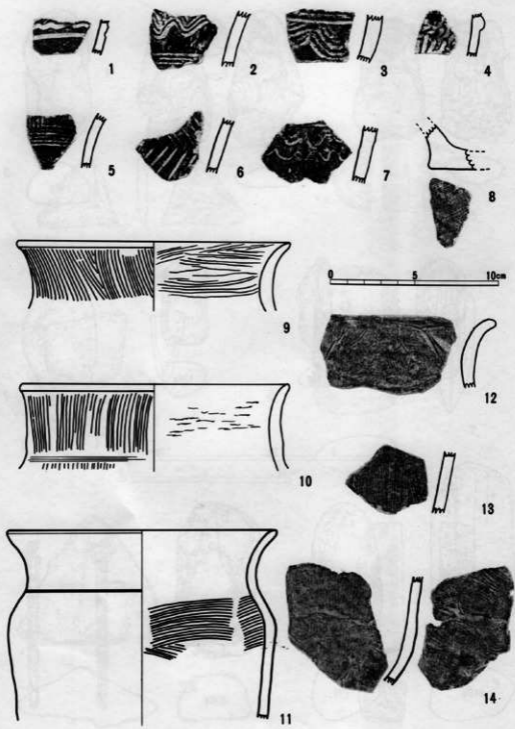


插图12 第1号住居跡出土須惠器片

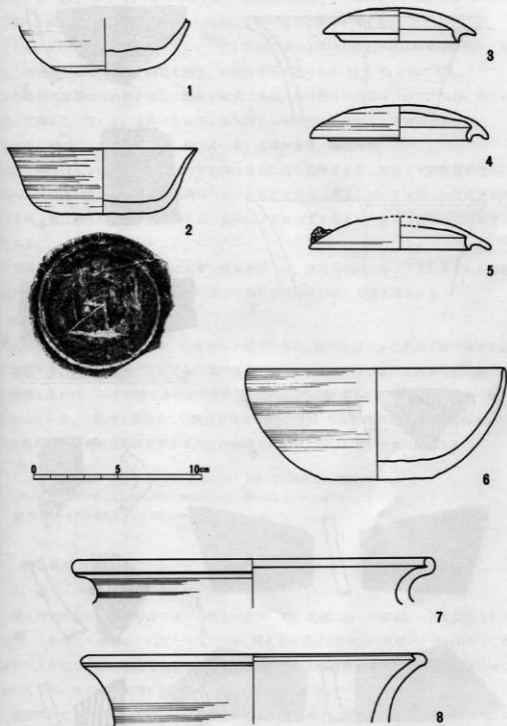
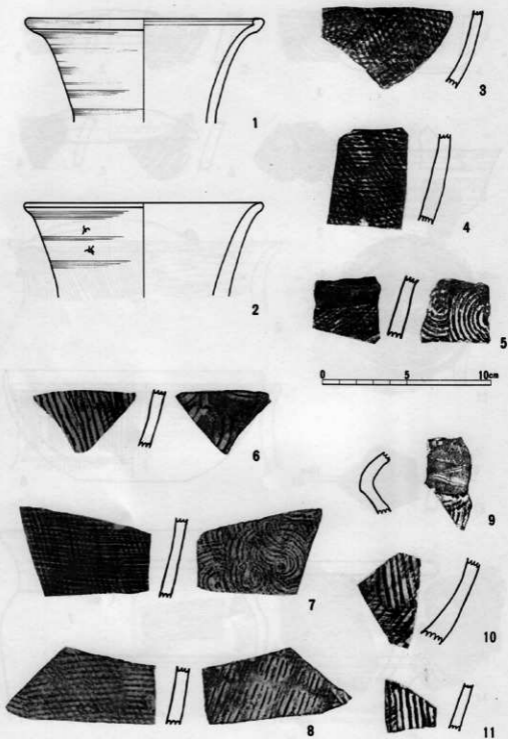


插图13 第1号住居跡出土須惠器片



蓋3)・鉢1・壺2で、他に甕の胴部などがある。

12-1・2は蓋環の身部で、1は灰白色を呈し焼成堅緻である。2は暗灰色で口縁部にゆくに從つて厚みを減ずる。両者ともへら削りの底面にZ形に見える窯印を有する。

3・4・5は蓋環でかえりを有するがツマミ部分の破片は無い。3と5には緑色の自然釉を見る。内外面ともに回転ナデ調整を施す。口径は不定で各々9.0・10.5・11.0cmである。

6の鉢形須恵器は灰白色を呈し、堅緻な焼成である。へら削りの底部厚11mmで、口縁にゆくに從つて薄くなっている。全体の3分の1を欠失するが器形をうかがうことが出来る。

7は甕口縁部でS字状を呈し、口縁上に一条の沈線が走る。焼成良好。

壺形土器は13-1に示したが、広口で色調は褐色に近く堅緻である。回転ナデ調整痕が残る。

13-3~11はいずれも須恵器胴部破片(9のみ肩部で拓本は裏面)で、6・10・11は直線状の叩き目、他は格子目の叩き目を有する。裏面には青海波文を見るが、8のみ直線棒状の叩き目である。

須恵器は本住居跡の年代決定に重要な役割を持つが、無高台の環や鉢は7世紀末から8世紀代の所産であり、住居跡の存続とあいまって器数を増加せしめたものと思われる。

灰釉陶器 (挿図12-8, 13-2)

灰釉陶器片は5片出土したが、いずれも小破片である。12-8はアメ色を呈す甕口縁で口唇が内屈する。胎土は緻密で良好であり瀬戸焼系の陶器であろう。13-2は表面茶褐色の広口壺口縁部と思われ、胎土は密であるがやや軟質の感がある。内面は灰白色で小石を含み、石燻^{イロ}となっている。他の3点は美しい窯変を見せる壺口縁で、やはり瀬戸焼系と考えられる。

灰釉陶器の所属期同定は資料不足のため困難であるが、少なくとも中世以降であろう。

注1

ツルネ遺跡では、昭和51年、土師器を出土した方形の第3号住居跡内に、環状に置かれた25点の河原石群が出土し、渡辺誠氏の御教示により、編物用おもり石と判明した。8個1組で使用される民俗資料とよく合致し、平均重量は765gであった。

2. 第2号住居跡

(1) 遺構

第2号住居跡は、第1号住居跡から南方へ約30mの、道路に沿った畑地において発見された。当初、上部層より須恵器片の出土をみたため、第1号住居跡と同時期の遺構かと思われたが、やがて、より古い時期の所産であることが判明した。発掘面積は僅か4×5mで、地表下40cmにおいて一軒の住居跡が出現した。床面の海拔は656mである。

検出された住居跡は、その約6分の1の南壁部分を道路下に残すが、おおよそ3.8×3.2mの隈丸方形の住居跡であることが想定され、比較的小型の住居跡に属するものであった。

中央部に2個の石組みを伴う、焼土の詰まったピット(P₅)と、細い4本の支柱及び7ヶ所の小ピットを備える。支柱の直径は16cm、深さ42cm内外で、相互の間隔は東西1.4m、南北1.6mである。住居跡外には西側限に1ヶ所のピットがみられ、また東壁は後世のピットにより壁の一部を破損する。

住居跡のローム層への掘り込みは、北側の浅い部分で18cm程度であった。床面直上には多量の木炭の集積が検出され、火災に遭遇したと思われる様相を呈していた。特に西壁に近い部分の炭は、直径5cm程の丸太状のものが住居跡の中心に向かって放射状に並び、一部は周壁に突き刺さった状態が観察された。炉周辺の炭には板状のものも見うけられる。炭片の一部は放射性炭素による年代測定用に採取された。

住居跡内覆土は、挿図14に示した様に4層が整然と堆積し、遺物の包含は第3層に最も多く認められた。復元された4個体の土器はいずれも同層よりの出土である。

遺物は床面には比較的少なかったが、南壁中央付近に存在する半掘の浅いピット内に、10数片の土器の集積がみられた。

(2) 遺物

第2号住居跡の遺物は、表層出土の須恵器(坏蓋)1を除く全てが本住居跡に所属するものと思われ、復元個体4、土器破片87、下呂石チップ4、砥石?1がその全容である。

土器の内容は、高環形土器・器台形土器・小型コップ形土器・甕形土器・鉢形土器などで、甕・鉢の破片を含めて推定した総個体数は13以上になる。

挿図15-1は高環形土器で、口縁及び脚のつけ根の部分に刷毛目が残る。高さ14cm・口径18.8cm、台部径10.4cm。胎土に1mm大の砂粒を含むが、表面はよく調整されて滑らかである。全体に黄褐色を呈し、器厚は口縁で3mm、台で6mm。坏部は深く、裾はわずかにふくらみをみせて内湾する。他の1点(8)も同様であるが、台の内部に球状突起が付いている。

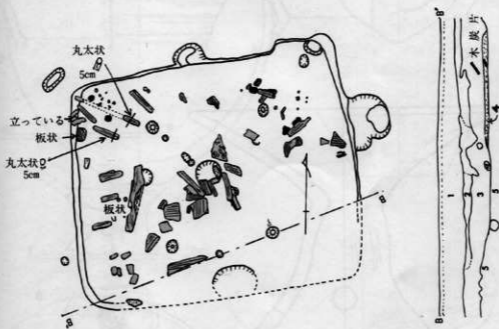
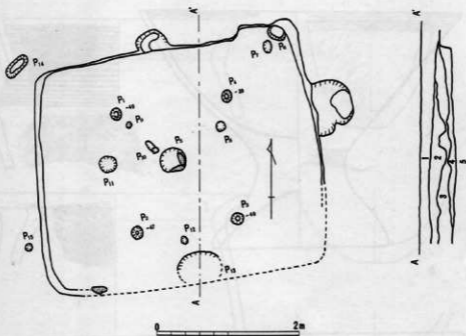
2・3・4はピンクがかかった褐色の鉢形土器で、口縁部と頸部に5mm間隔の刻目を有する。

5は甕口縁部で暗灰色を呈し、焼成はあまり良くない。口唇は角張り、頸部はくの字に折れる。

6も同様の色調・焼成で、ススの付着が著しい。無文であるが頸部に沈線状の細いくびれがある。器厚は5mm。

器台形土器(7)は、高さ15.5cm、口径18.4cm、台径13.5cm、器厚5mmで、黄褐色を呈し、胎土に1mm大の砂粒を含むが器面はよく調整されている。脚柱中央部はわずかにふくらみを見せ、3孔を有する。身部・裾部とも直線的な傾斜をなす。

16-1の甕は赤褐色で砂粒を多く含み、焼成は良好である。櫛状工具で横位の沈線がぐまなく施される。口径13.9cm、器厚4mmである。



- | | |
|----------------|-------------|
| ① 黑色表土層 | ④ 炭混じり黄褐色土層 |
| ② 黑色腐植土層 | ⑤ 黄褐色ローム層 |
| ③ 炭・ローム混じり褐色土層 | |

挿図14 第2号住居跡 平面図・断面図

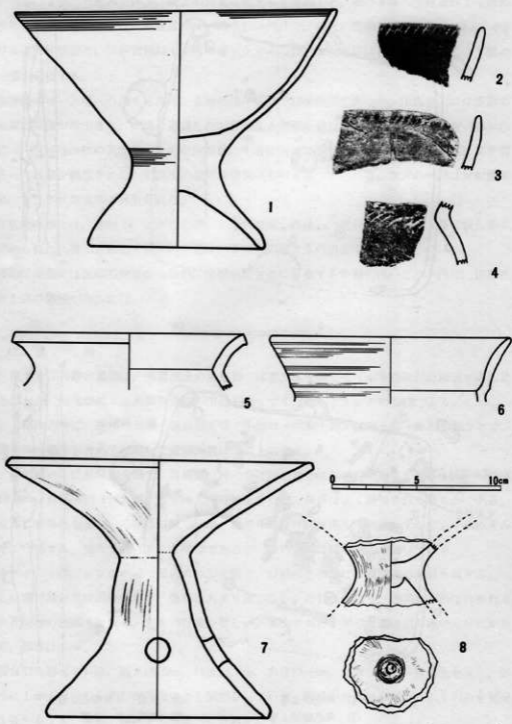


插图15 第2号住居跡出土土器

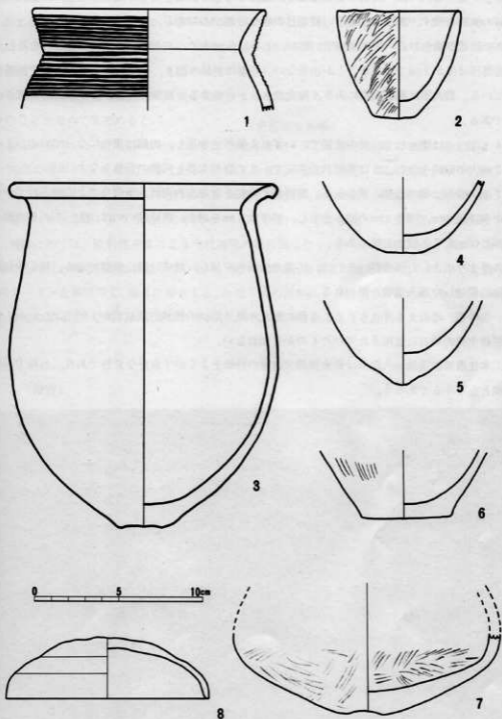


插图16 第2号住居跡出土土器

コップ型土器(2)は、灰色の精製土器で、底部は小さく安定を欠くが焼成は堅く、内部に手こねの痕跡を残す。表面には細かい刷毛目の様な斜線がみられる。

3の甕は赤褐色に近い堅い焼成で、砂粒、ときに5mm大の小石を含む。全体に砲弾形をなし、底部径は僅か2cmで立てることが出来ない。口縁は外側へ開き、口唇を折り返して指で調整している。最大巾は胴部中央にあり、無文でスガが付着する。高さ20.2cm、口径16cm、器厚6mmである。

4・5・6は甕もしくは鉢の底部で、いずれも暗灰色を呈し、内部は黒色になっている。1～2mm大の砂粒を含む。5は乳房状の尖底で、3の甕形土器と同様の形態をなす。

7は、壺形土器の底部と思われる。黄褐色で砂粒を含み、内面はへら削りでよく磨かれている。中央に径2cm、深さ2mmの凹みを有し、器厚は6mmを測る。興味深いのは、15-7の器台形土器にぴったりと収まる事である。

表層より出土した須恵器(8)は、坏蓋で青灰色を呈し、焼成は粗く軟質である。第1号住居跡に関連した混入遺物と思われる。

この他、砥石とも考えられる、3個に割れた長さ25cmの棒状の流紋岩が1例出土したが、住居跡中央の炉石に使用されていたものかも知れない。

本住居跡の遺物の大部分は弥生後期欠山期の特徴をよく示す良好な資料であり、当地方の指標となりうるであろう。(吉朝)

(3) 放射性炭素¹⁴による年代測定について

前述の第2号住居跡で発見された柱状の炭化物について、平板測量のあと、柱状炭化物ごと一括ポリ袋に収蔵し、試料No.2について、昭和54年10月にC¹⁴ datingを学習院大学木越邦彦教授に依頼し、昭和55年7月に、測定結果の報告を受けた。

試料No.2 : 2260±110年 B.P年代 Gak-9054

310B・C

- ・ 年代値は¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5570年を使用して測定された。
- ・ 誤差(±)は β 統計値の標準偏差 σ にもとずいて算出した年数で、標準偏差(one sigma)に相当する年代である。
- ・ B.P.年代は1950年よりの年数である。
- ・ Gakは学習院大学 木越邦彦の略号(Gakushuin University Kigoshi Laboratory)

結果は、1950年を基準にして、2370年前から2150年前の間に入る確率が統計的に68%であることを意味している。これは、一般には縄文晩期から弥生前期にあたる。

若し、もっと高い確率を求めれば、2480年前から2040年前の間に入る確率は95%となり、さ

らに、2590年前から1930年前の間に入る確率だと99.5%になるのである。

出土遺物から、弥生中期末から後期にかけての時代と推定していた年代より、かなり古い年代の測定結果を得た。出土遺物から、1950年前から1850年前の間と推定していたのにたいし300年程度古い測定値が得られた。(確率68%の場合)

なお、2000年前ころは、5,60年実年代が古くでる傾向がある。(木越教授より教示)

そのことを含めてまとめると、

(全国的な基準)

- ・68%の確率……紀元前250年±110年 B.C 4世紀～B.C 2世紀 縄文晩期～弥生前期
- ・95%の確率……紀元前250年±220年 B.C 5世紀～B.C 1世紀 縄文晩期～弥生中期
- ・99.5%の確率……紀元前250年±330年 B.C 6世紀～A.D 1世紀 縄文晩期～弥生中期
- ・遺物(弥生土器)より推定した年代……A.D 1世紀～A.D 3世紀 弥生中期～弥生後期

飛騨に於ては、放射性炭素による年代測定の見聞例はなく、今回が最初である。飛騨における弥生時代の編年研究は確立していない。我々の推定とは異った測定値が出たが、一つの科学的データーを得たので、参考に報告する。ただ一点の試料による結果であるため、今後のdatingの増加によって、さらに、飛騨における弥生時代の究明されることを期待したい。

(石原)



発掘風景

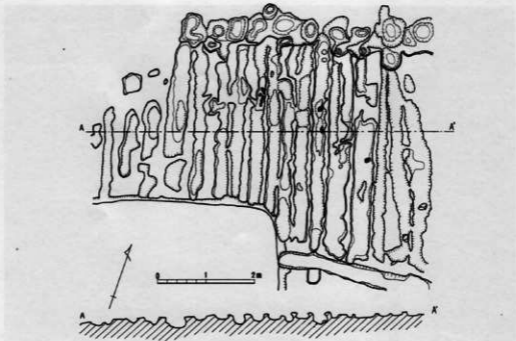
3. 溝状遺構 (挿図17)

第1号住居跡の北側部分に、一部住居跡と切り合いをみせて出現した溝状の遺構は、ほぼ6×8mの方形の区画の中に巾20~40cmの溝が約17本、整然と並んでいるものである。

溝は表層下32cmの黄褐色ローム層を掘り凹めて作られ、浅いところで8cm、深い部分では25cmある。溝の断面は逆オーム形(び)を呈し、やや西向きに傾く。溝は水平ではなく、台地のゆるい傾斜に沿って北に延び、溝内部は漆黒の腐植土で満ちていた。北端は一律に溝が終了し大小の円形ピットが並び、うち4本は柱穴様である。南端は直交する一条の溝で区切られ、西端は溝が徐々に浅くなって終了する。更に西には大きな溝が住居跡を横切って南北に走り、南部で西へカーブして続いている。拡張区の発掘時に初めて確認されたため、住居跡内における溝状部分は検出しえなかったが、住居跡内堆積土と溝内の黒色土との識別が困難であったことも事実である。

溝状遺構は、第1号住居跡の時代以降に作られたものであることは確かであるが、溝内からの出土品は少量の円礫と須恵器片3が見い出されたのみで、時期を決定するに足るものは確認しえなかった。

溝状遺構の性格については、現在のところ類例に乏しいため、断定を留保せざるを得ないが可能性として耕作に関連した遺構であるとの説が有力である。



挿図17 溝状遺構 平面図・断面図

4. なべかぶり塚

(1) 本遺跡の発掘調査の最終段階として、「なべかぶり」塚の発掘が9月1日・2日に行われた。「なべかぶり」は、当地域に民間伝承として残る江戸時代頃の塚(墓)の呼称であり、薬師野地内においては一基存在する。「なべかぶり」が特殊な意味を持つ墓であることは、「掘ると崇りがある」として今日までいっさい手が加えられずに忌避され続けて来た事でうかがい知ることが出来る。同様のものは近接の部落にも数ヶ所存在し、確認はしていないが土盛りもしくは石積みのマウンドを有して、やはり忌避の伝承を伴っていると言う。

我々の調査の前段階における認識の程度としては、

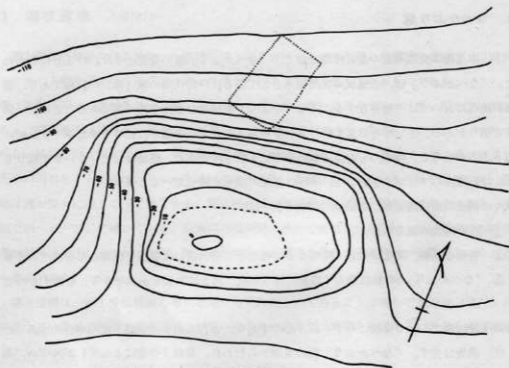
- ① 江戸時代の墓であること
- ② 特殊な状態、例えば災害・疫病などで死亡した個人或いは集団を埋葬したものである事
- ③ 「なべかぶり」の呼称は恐らく埋納に伴う形式(例えば鉄鍋をかぶせる等)を指すものであろうこと。

等の子備知識でもって発掘にたずさわったのであり、これらの事の実証と記録が目的であった。

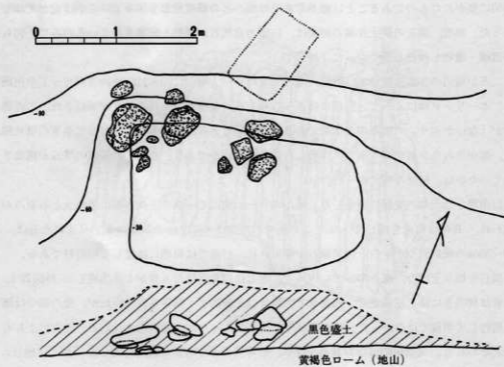
(2) 調査は先ず、「なべかぶり」塚の実測から行われ、草刈り作業によって1.8×3m、高さ1mの墳丘が露呈された(挿図18)。やや方形に近いマウンドは、所々に丸石が露出し人為的に築かれたものであることは確かであったが、どの程度原形を保っているかは定かではなかった。事実、墳丘の排土作業の結果は、13個の自然石が雑然と配置されているのみで、何らの遺構・遺物も検出し得なかった(挿図19)。

ところが周辺の作業において、墳丘の北方2mのローム層面に70×110cmの方形ピットが出現し、ボーリング棒によって、内部にはぎっしりと石の集積がみられることが確認され、この部分が「なべかぶり」の実際の主体部である可能性が考えられるに至った。従って本来の墳丘部は、削小されたか耕作等で南方へ移動したかのいずれかであり、当初どの程度の墳丘が構築されていたかは、結局不明であった。

次に出現した土壌の発掘に着手した。地山のローム面にくっきりと長方形に黒色土と石組みが現われ、長軸は南北を指していた。この面での海拔は652.7mである。詰め込まれた石は、20~35cmの流紋岩やチャートの川原石が使用され、付近では自然には産しない石材である。21個目を取り上げた、深さ70cmのレベルで、北方に頭を向けた人骨が1体出現した(挿図20)。人骨は横向きに膝を屈曲させ、頭蓋骨と大腿骨は比較的好く保存されていたが、他の部分は既に腐朽して明確ではなかった。頭蓋骨はや、扁平であったが、詰め込まれた石の圧力によるものと思われる。発掘中にはなお異臭が漂い、埋葬後あまり時間が経過していない如くに感じられた。人骨は1体分のみで、副葬品の様なものは一切見い出せなかった。



挿図18 なべかぶり塚 実測図



挿図19 なべかぶり塚遺構 平面図・断面図

なお、発掘終了後は、地元了心寺住職による読経・供養が取り行われ、遺骨は同寺に納めさせて頂いた事を付記しておく。

(3) 埋葬された遺体については、須田圭三医師が歯の鑑定を行い、年齢は20～30代とのことであり、死因については培養試験(岐阜大学医学部)により、伝染名の病原菌の検出は認められなかった。発掘によって認識された事は、

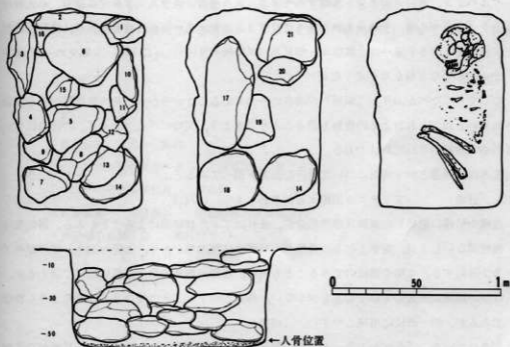
- ① 規模は不明確ながら墳丘を有している。
- ② 遺体は1体、方形の土壌の中に石詰め状態で埋葬されていた。
- ③ 副葬品は無く、時代判定となる遺物も見い出せなかった。

以上の事柄程度であり、むしろ疑問に残る部分が多く感じられた。それは、

- ① 墳丘構築の意味
- ② 木棺の形跡が無いのに土壌がくっきりと方形を呈すること。
- ③ 石によって詰め込まれた、特殊な状態をなすこと
- ④ 「なべかぶり」の名称の意味が不明のままであること

などであり、いずれも「なべかぶり」そのものにかかわる、重要な事項ばかりであった。

その後、報告書作製の作業過程で、古文書等により「なべかぶり」についての新たな知見が加わったので、以下に考察を混じえて述べてみたい。



押図20 なべかぶり塚遺構内埋石及び遺体

(4) 「なべかぶり」の名称について、2例の文献を得ることが出来た。その1は、「歴史公論10」No47の江戸時代の災害年表(齋藤洋一作製)の中に、「享保十五年十一月『鍋かぶり』(丹毒)流行」の記事が見られ、なべかぶりが病名であることが判明した。

その2は、「古事類苑方技部十七疾病三」の項に、2ヶ所にわたって記事がみられ、こちらはかなり詳しく記されているので、以下に抜粋してみたい。

(武江年表四)

享保十五年十一月、鍋かぶりという疾はやる。鼻より上黒くなる。

(救世袖曆) 疹疫ノ事蹟

寛保ノ頃、ナベカブリトイヘルハヤリ風有テ、死亡甚多カリキ、予八歳ノ時、此病ニ罹レリ、快復ノ比ノ事ノミウスウス覚タリ、眉ヨリ上脳後髮際ニ至ルマデ黒色ニナリテ、鍋ヲ冠リタル如シ、色深モノハ多ハ救ヒガタシ、予モヤヤ正黒ニ近カリシヨシ、既ニ解スルノ後、其色ウスク残りテ、其黒色ニ小疹出デ、少シ水泡有テカシケタリト覚タリ、其後似タルモノモナシ、今考ルニ宝曆明和ノ頃、水痘ノ類ノ水痘ニモアラズ、又一種ノ発疹一般ニ流行セシコトアリ、其発前全ク温疫ニテ未ダ疹ヲ発セズシテ救ハザル者ハ、医モ疹序ナルヲ知ラズ、時疫トノミヒテスマシタルコト多シ、辛クシテ死ヲ免ルル時、總身ニ疹ヲ発セリ、発セル後ハ事ナクシテ平安ナリ、此疹発セネバ、多クハ救ガタシ、救得レバオソカレトカレ疹発セザルハナシ、水痘ノ如ク少シ水泡アルモアリ、ナキモ有、人々ニシテ少ツ差別有、小大顆粒トトノフラザル疹ニテサノミ稠密ニモアラザリシ、私ニモツケテ疹疫トイヘリ、鍋冠モ此類ノ毒深キモノカト思ハル、其以来一切見及バヌ時疫ナリ……(以下略 原文の一部、漢字、かなづかいなど解かりやすく変更)

ここでも「なべかぶり」(鍋冠)が病名の一つであることが分かり、その症状等が良く記録されているので、おおよその理解を得ることができよう。同時に「なべかぶり」の語源についての由来が解明されたわけである。

ちなみに、丹毒という病気について身近な医書を調べてみると、

「丹毒」ブリタニカ国際大百科事典 4 1974.3

皮膚や粘膜に限局した連鎖状球菌感染症。まれにブドウ球菌によることもある。潜伏期は数時間ないし2日、悪寒とともに発熱し、局部には擦過痛があり、赤斑が起き、境界鮮明で多少隆起する。水泡や壊疽のできることもある。最初の病巣の発赤腫脹は数日で消えるが、ほかの部位に拡大していくことも少くない。再発しやすく、その場合多くは最初よりも軽症であるが、同一部位に再現しやすい。(後略)

と記されている。「なべかぶり」と丹毒の関連については、同一のものであるか判断がつきかねるが、いずれ専門家の解釈をあおぎたいと思う。

次に、飛騨地方の流行病の歴史をひもといてみると、江戸時代に関しては、

- 元禄四年 (1691) ・是歳 飛州麻疹流行
- 享保十五年 (1730) ・是歳 飛州麻疹流行 田畑凶作
- 延享元年 (1744) ・二月某日 飛州 頃日痘瘡流行す
- 延享四年 (1747) ・是歳 飛州大風邪流行す

等が知られる。(岡村利平著「飛騨編年史要」大正10年発行)

これによると、享保十五年全国に「なべかぶり」の流行した年に飛騨では「麻疹」(はしか)が流行しており、〔救痘袖曆〕による「寛保ノ頃」では、延享元年(寛保三年二月二十一日改元)に「痘瘡」が流行している。果してこれらが「なべかぶり」であったかについてはなお検討を要するが、少なくとも「なべかぶり」という言葉が当時飛騨でも使用され、それがいつの間にか塚の名称として後世に伝わったという推測は、十分考えられることである。

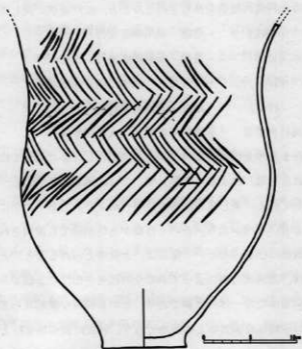
地元の伝承によれば、当時流行病によってかなりの死者が出ている様であるが、今回の発掘で確認された様に、一基にただ一体の埋葬であり、しかも特殊な埋納状態であった事は、やはり「なべかぶり」という特殊な病気ゆえの所為であり、村民に畏怖感を与えたための埋納形態、そして伝承遺存なのであろう。墳丘構築の意味も、敢えてこれを構築して忌避の目印にしたという推測が成り立つ。さらに、流行病を封じ込める意味で、病人がなお息のあるうちに埋葬したと言う、一部の伝承も、あながち想像のみの産物ではなからうと考える。

今後、新たな文献資料の検討や、各方面からの助言を得て、研究を深化させてゆきたいと考える。

(吉朝)

〔参考文献〕

- ・歴史公論」 10 No47
- 江戸時代の災害年表 斎藤洋一作製 P14
- 昭和54年10月 雄山閣
- ・古事類苑 方技部 昭和52年 吉川弘文館
- ・飛騨編年史要 全 岡村利平
- 大正10年11月 住伊書店



挿図21 内垣内遺跡出土 弥生式土器



なべかぶり塚の供養

V. 考 察

薬師野遺跡の発掘調査は、縄文時代に関する遺跡の多い飛騨地方において、考古学資料、特に発掘資料の極めて少ない弥生時代以降歴史時代に至る部分を補うに足る、貴重な資料を提供した。弥生時代後期の住居跡及び奈良朝直前期の住居跡の発見はもとより、弥生式土器のセット、住居跡に伴う鉄器など、いずれも当地方では初めての発見であり、放射性炭素による年代測定などを加味したこれらの学術的研究の成果は、当地方の考古学研究の進展に大いに寄与するものと思われる。

本発掘調査において確認された個々の遺構・遺物について、年代の古い順に考察を加えてみたい。

まず、第1号住居跡において、上部層より攪乱・混入の形で出土した弥生式土器片は、量的には僅かであるが、中期後半の型式の特徴をよく示し、石包丁などの石器類も伴出しているところから、この時期の住居跡が存在した可能性を示唆している。既に岐阜県史において表採資料による弥生式土器の記載があり、これによると、櫛描き沈線による粗い羽状文の土器など、貝田町式から発展した地域的型式の存在が考えられるとしている。^{註1} 今回の発掘資料にも同類のものを見るとともに、長野県の型式（栗林・百瀬式）に比定される資料もまた共出した。太い櫛描きによる平行沈線・波状文を段状に繰り返す土器がこれであり、東海地方における長床式（或いは高藏式）平行の土器型式である。このように、県史の記載の域を越えるものではないがこれによく照応する内容は、弥生中期後半の様相を一層鮮明に浮き彫りにするものである。飛騨地方における弥生中期資料は、貝田町式深鉢形土器を指標として、ひじ山・内垣内・西ノ山等の遺跡が知られるが、いずれも昭和10年代の赤木清・加藤輝次らの採集資料による研究に準拠しており、その後は昭和43年の亀ヶ平遺跡の報告^{註2}を除いて目立った資料の増加は無い。近年、内垣内遺跡において良好な深鉢土器資料が得られたので、この機会を利用して紹介しておきたい。挿図21に示した土器は、内垣内遺跡において口縁部を地表に現わして直立した状態で埋まっていた本資料を、耕作者が発見して自宅に収納していたもので、研究会員が復元して市郷土館に出陳したものである。頸部がややくびれる深鉢形土器で、口縁部は欠失するが耕作の際に欠き取られたものと思われ、あと数センチ程度であろう。底部は少し張り出し安定は良い。文様は太目の沈線による粗い羽状文が胴部にくり返され、下半部は無文となる。口縁部破片が1点だけあり、口唇に刻目を有する。底部には木葉圧痕（蔞葉？）が残る。色調は黒褐色で焼成は堅緻である。以上、貝田町系の深鉢土器の好資料としてここに取り上げた次第である。

次に、薬師野遺跡第2号住居跡では、弥生後期の資料が出土した。住居跡の完掘には至らなかったがプランはほぼ確認され、弥生時代の住居跡としては下呂町の峯一合遺跡に一例を見るのみの当地方では、貴重な発見となった。注目に値するのは、本住居跡が混入遺物を殆ど伴わない単純遺構の性格を有し、出土した土器類が一時期における一住居のセットとしてほぼ把握出来た点である。石器を全く伴っていない点については、該当時期の普遍的な傾向でもあり、あるいは木器・鉄器の存在を考慮する必要があるかも知れない。

いずれにせよ弥生式時代の生活の一例を具体的に示し得たわけであり、後期の土器資料としても当地の指標となりうるであろう。

形式的には欠山期の特徴を有し、伊勢湾沿岸からの土器文化の波及・伝播の実態をうかがわせる。これは、ひじ山遺跡におけるパレス・スタイル土器類似の壺形土器^{注3}に共通した要素でもある。しかし弥生後期の様相は、一方でツルネ遺跡の方形周溝墓において出土した、長野県の箱清水式類似の土器片に見る様に^{注4}、中期に引きつづく長野県の型式との関連を斟酌する必要があり、今後の重要な課題であろう。

第2号住居跡に残された多量の木炭片については、放射状に並んだ棒状のものと、中央付近に多かった板状のものを確認し得たが、記録にとどめた段階で残念ながらこれ以上の追求はなしえなかった。また放射性炭素による絶対年代測定を行って期待を寄せたのであるが、予想外に古い値が出たため、傍証が困難となった。現在の段階では、測定結果を記録にとどめ、再度の機会を待って修正したいと考える。

第1号住居跡は、7世紀終末から8世紀にかけての遺構と考えられる。ローム面への掘り込みも深く、約40平方メートルの規模を持つ、かなり大型の住居跡に属する。出土遺物の須恵器には若干の時期差がみられるが、住居跡の存続期間を考慮する一つの目安ともなろう。須恵器が壺・杯・鉢・甕と器種を揃えるのに対し、土師器は甕形土器のみで、煮沸用として使い分けられたことを示す。東壁部の竈については破損がひどく、煙道による屋外への排煙施設等の構造は十分把握できなかった。

須恵器・土師器・鉄器を伴う住居跡の発掘例は、本例が当地方の嚆矢であり、比較検討すべき資料の乏しいのが悩みであるが、それ故に本住居跡の重要性は高く、今後の指標となろう。

一住居跡内の許容人数の試算については、研究者間でまちまちであるが、一応6～10人程度と考えるのが妥当であろうか。集落の問題については触れるべき材料を持たないが、少なくとも同一丘陵上の基部に縄文前期の包含地、中央部に弥生後期の住居跡、さらに本住居跡、近世墓塚と、順次下降する様相は、飛騨地方における古来よりの居住者の丘陵利用の実態と、生活面の変遷の問題について示唆を与えるものである。特に本住居跡の場合は、当然想定される生産基盤の変化にもかかわらず、なお丘陵上の居住が継続されていた可能性の一傍証となるもので

あろう。

溝状遺構に関しては、現在これに照合すべき十分な資料を持たないため、結論を出すには至らなかった。調査の過程で諸方面の方々から、丸太を敷いた「ころばし床」風の遺構ではないかとか、極めて新しい時代の機械力による耕作の跡ではないか、等の御助言を頂いたが、そのいずれにも該当し難い点が多い。土地の傾斜に沿って溝が走り、水平面でない事が住居説を否定し、溝の中が一定でない点も丸太説を困難にしている。一方、ローム面への掘り込みの形態は、機械力では不可能であり、意図的かつ根気よい作業による所産と見るべきであろう。現段階では一応、奈良時代を上限として「黒土層があまり推積していない段階」の時期における、何らかの「耕作」に関連した遺構（または痕跡）であると考えるのが、可能性としては高いと思われる。この場合の類例としては、弥生後期または五領期の畑の跡と考えられる「うね状遺構」の出土した、沼津市目黒身遺跡の例が参考となろう^{註5}。諸先学の御助言を賜りたい。

灰釉陶器・墓壇・なべかぶり塚については、当地が薬師野の地名を冠することに鑑み、以前から墓所的な環境下にあったことが考えられる。陶器・珠数玉等の出土はその供献品としての性格を有するものであろう。なべかぶり塚は、Ⅳ章の4で詳述した様に、江戸時代中期という近世墓制史に関する興味深い一資料を提供した。特に文献史料の援用を受けて、一層実感を伴った歴史研究が体得できた点で、ひとしおの感慨があると共に、今回の調査では解明出来なかった部分も、今後の同種の調査や文献の発見、過去帳の検討などの作業によって漸次、明らかとなるであろう。

以上、薬師野遺跡発掘調査で認識された、種々の成果について述べてきたが、一方、今回の調査の範囲で把握し得なかった部分についても言及しておく必要があろう。

その1つは集落の問題であり、もう1つは土壌分析・花粉分析等の、科学的研究方法の導入である。前者については、発掘面積の制約と期間の関係上、極めて限られた部分の調査で終ったため、調査の手の届かぬまま破壊された部分の「土の一頁」は、未知のまま永遠に失われたのである。集落の研究にとって、例えば台地上の全面発掘は必須条件であり、種々の事情が現実的にはそれを不可能にしているとは言え、近くは久々野町堂ノ上遺跡の例など^{註6} 身近の好例を参考に、今後とも検討を要する問題である。薬師野第1号住居跡の時代とほぼ同時期にあたる、富加町東山浦遺跡の場合では、7世紀後葉から8世紀前葉の約60～70年間の範囲に推定しうる住居跡が、実に19軒の多きに達していると言う。^{註7} 地理的条件等の異なる飛騨と美濃との直接的な比較は有効とは思われないが、では当地方ではどのような状況であったのか、また生産基盤とのかかわりにおける台地上の住居の性格等についてのアプローチなど、今後に寄せる問題点は山積しているのである。

次に、科学的研究方法の導入については、第2号住居跡において放射性炭素による絶対年代測

定がなされたが、今回の成否は別として、一層正確な資料をつみ重ねる作業を積極的に行う必要がある。年代測定のみならず、土壌の分析や花粉分析によって、当時の植物相や栽培植物食生活の一面など、貴重なデータを得ることが可能であり、郷土の考古学研究にとって科学的方法論の導入・活用は不可欠の要素である。

最後に、薬師野遺跡は、弥生時代から奈良朝直前期、そして江戸時代中期という悠久な時間の流れの中に、それぞれ歴史的事象の一部を垣間見せて、現在消滅した。しかし今回の発掘調査によって記録され資料化された種々の学問的成果は、今後の研究の進展に深く寄与するものばかりである。現在に生きる我々の責務として、歴史の解明と文化遺産の子孫への伝達という努力は、決してなおざりにしてはならないと確信するものである。

稿を終えるにあたり、発掘に協力して下さった多くの関係者、御助言を下さった各方面の研究者の方々に、深く感謝の意を表したい。

(吉朝)

註1 大参義一 「岐阜県史第四章 飛騨地方における弥生文化の展開」 1972.3

註2 大野政雄 「宮村史」 1968

註3 註1に同じ

註4 高山市教育委員会 「ツルネ遺跡発掘調査報告書」 1978

註5 小野真一 「沼津市目黒身遺跡集落址」 考古学ジャーナルNo.27 1968

註6 久々野町堂之上縄文時代遺跡は、昭和48年から52年まで5回にわたる発掘調査を実施し、総発掘面積は1,684 m²に及んでいる。住居跡の検出は24軒に登り、なお総面積の3分の2が調査継続対象となっている。集落研究の意義のみならず、今後の発掘調査姿勢の好例として、高く評価すべきであろう。

久々野町教育委員会 「堂之上遺跡第1～5次調査概報」 1978.3

註7 吉田英敏 「富加町史通史編」第二章 1980.6



圖版 1
 遺跡遠景
 A 蒸餾野
 B 尖林



圖版 2
 第1号住居跡



圖版 3
溝狀遺構



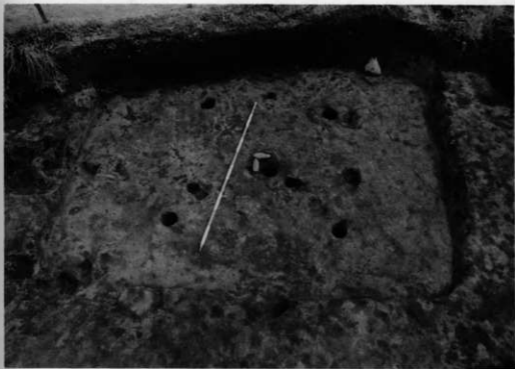
圖版 4
溝狀遺構發掘前



圖版 5
第1号住居跡
竈跡



圖版 6
第2号住居跡（放射状炭化物）



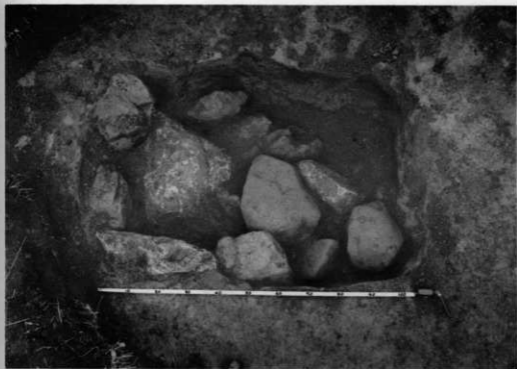
図版 7
第2号住居跡



図版 8
なべかぶり塚

図版 9

なべかぶり土罐内埋石

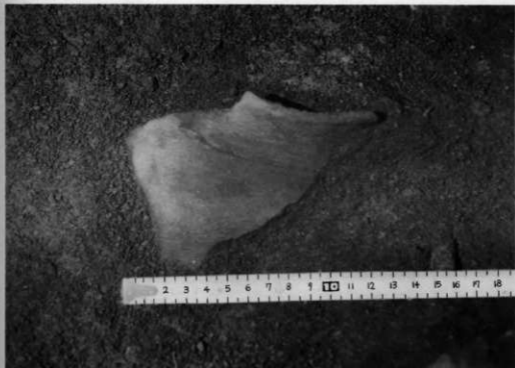


図版 10

なべかぶり土罐内遺体



圖版 11
第1号住居跡内土師器出土狀態



圖版 12
第2号住居跡内器台出土狀態



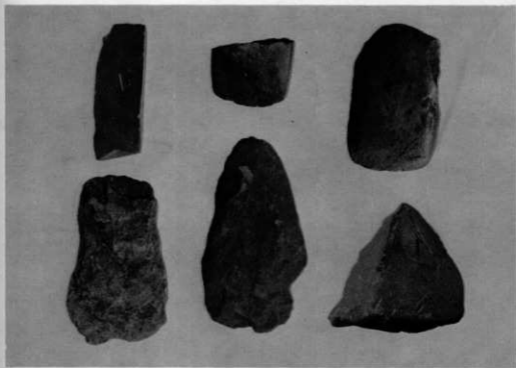
図版 13

第1号住居跡出土

磨製石斧

打製石斧

砥石

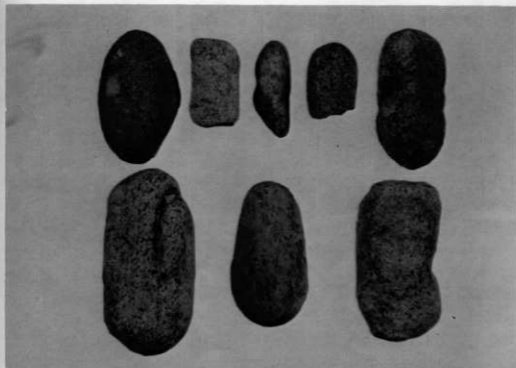


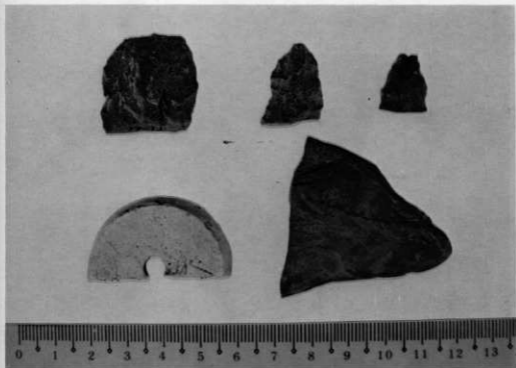
図版 14

第1号住居跡出土

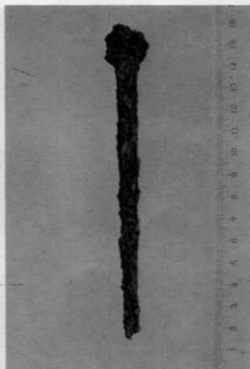
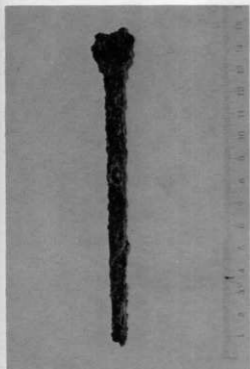
すり石

おもり石類





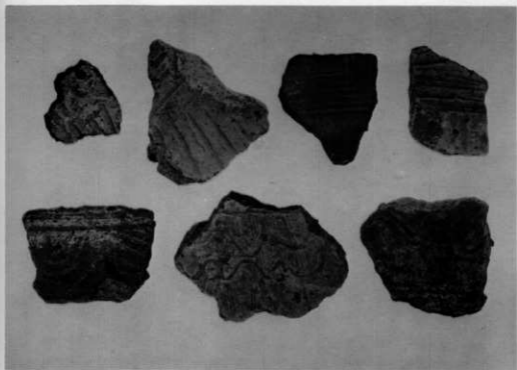
圖版 15
第1号住居跡出土 石器 石槌 紡錘車 石包丁



圖版 16
第1号住居跡出土 鉄器

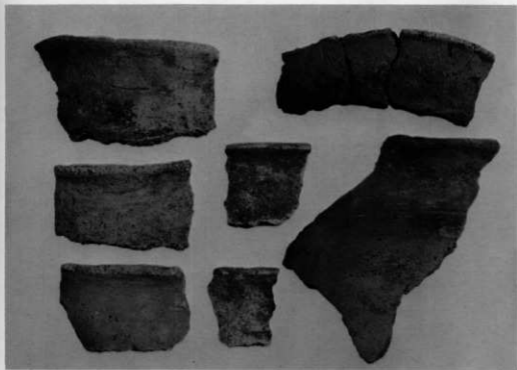
圖版 17

第1号住居跡出土
弥生土器片



圖版 18

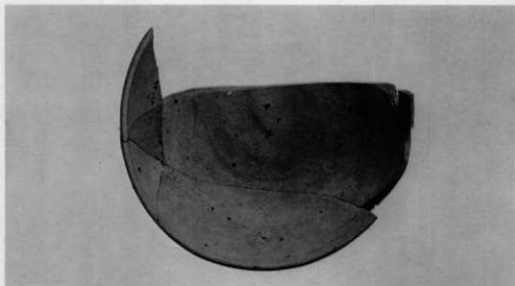
第1号住居跡出土土器器



側
面



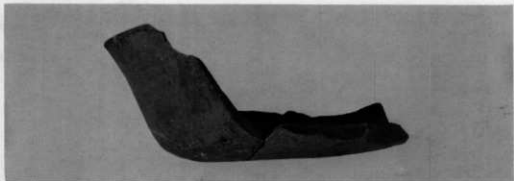
平
面



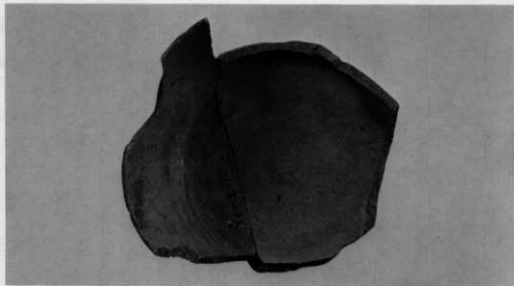
底
面



側
面



平
面



底
面



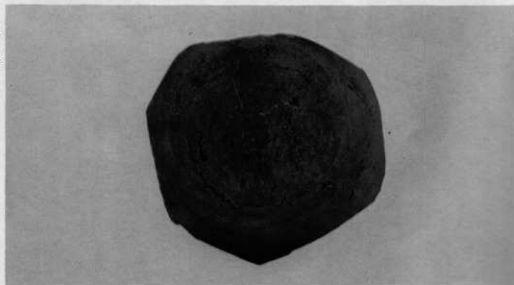
側
面

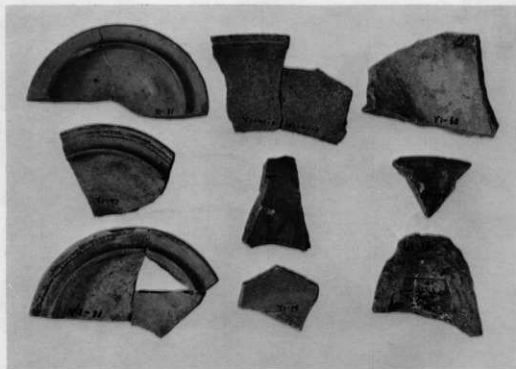
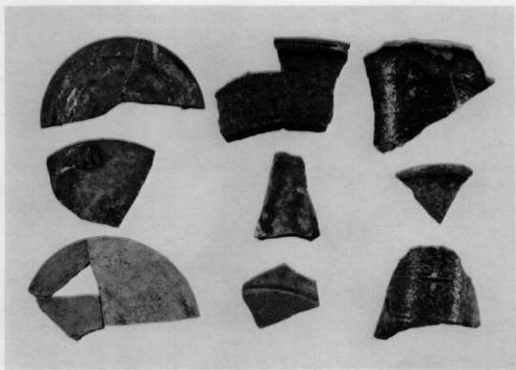


平
面



底
面







图版 26

第2号住居跡出土
器台形土器

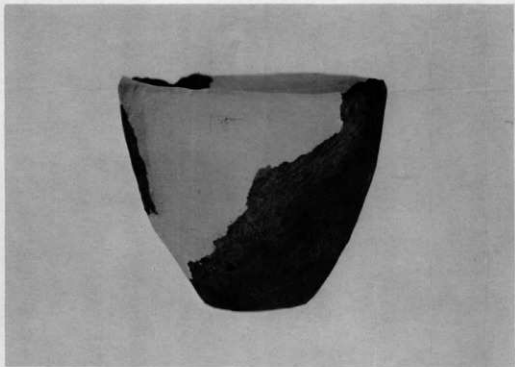


图版 27

第2号住居跡出土
高环形土器

圖版 28

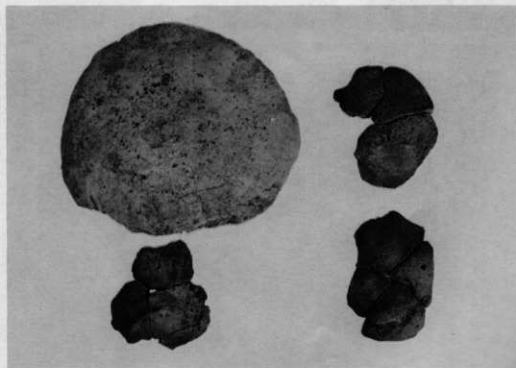
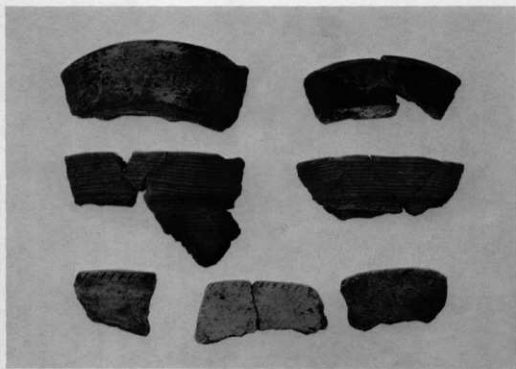
第2号住居跡出土
コップ形土器



圖版 29

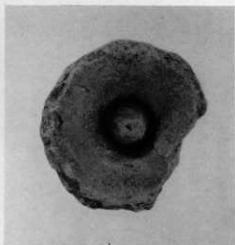
第2号住居跡出土
壺形土器





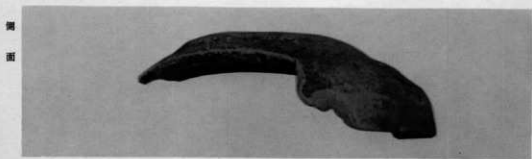


側面



底面

圖版 32
第2号住居跡出土
高环形土器片



側面



内面

圖版 33
第2号住居跡出土
須惠器环蓋

江名子薬師野遺跡発掘調査報告書

昭和56年3月 発行

編集 高山考古学研究会
発行 高山市教育委員会
印刷 大進社
高山市有楽町40番地